



— サウンドエッセイ —

コンサートホールの音風景

(株)永田音響設計

代表取締役社長 工学博士 永田 穂

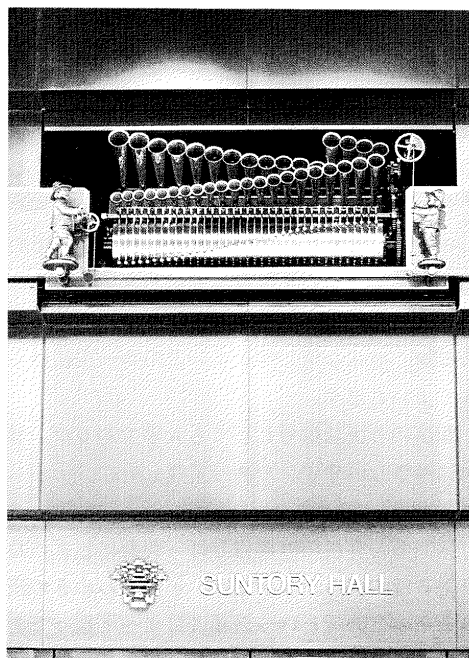
いま、東京では大小約10のホールで、年間3000回を越えるクラシックのコンサートが行われている。

コンサートは美術展とちがって、一期一会の世界、それだけに、コンサート前にはある種の期待と興奮がある。本来はヨーロッパのように帰宅をして、気分をあらたに音楽に向かうというのが本来の姿であろう。クロークに荷物を預け、会場でスナックをとる一時があれば幸せといわねばならない。大体は駆け込み乗車、仕事の残滓を肩に背負ったまま席につくというのがわが国のコンサートゴアーの実情ではないだろうか。

サントリーホールによってやっと実現したホールサービスの普及によって、心地好い受付やスムーズなクロークの対応を受けられるホールが増えてきたことは嬉しい。これも大事なコンサート風景である。しかし、依然として、各ホールで繰り返されているあの開演前の不躰なアナウンス、聴衆側の問題だといえばそれまでだが、コンサートホールにはあってはならない音風景ではないだろうか。開場から終了までの音風景のスケッチをお届けしよう。

開場前の音風景

最近、開場のサインにカリオンを備えたホールが増えてきた。また、ヨーロッパの寺院の鐘もある。しかし、来場者との結びつきがいま一つしっくりしていない。この点でサントリーホールのエントランスの扉の上のパイプオルゴール（機械仕掛けのオルガン）はうまい仕掛け



だと思う、ここでは、開場の時刻になると入り口扉の直上に音楽によってパイプオルゴールが現れ、短い曲を演奏する。発生はオルガンのリード管、どこかの広場のスピーカからの音ではなく、本物である。これは楽しい。着到（歌舞伎の呼び込み太鼓）の日本版とでもいうべきだろうか。このオルガンは12時と午後の3時にも演奏され、アークヒルズのサウンドスケープとなっている。

開演ベル、開演チャイム

開演の信号音の選定は設計段階で必ず取り上げられる課題である。

ブザーやチャイムのような無意味な信号にすべきか、音楽がよいかは議論の分かれるところであるが、ヨーロッパのホールでは照明の点滅で開演の合図にしているところもある。オペラやガラコンサートなどでは、派手な音、わくわくさせるような音楽もよいが、室内楽などに仰々しい音楽はふさわしくない。催し物によっていくつかのチャイムを用意している会館もある。東京文化会館の小ホールではたしか、ブザーであるが、地味な催し物が多いこのホールにはこれでよいと思う。

開演の合図は信号としても大事であるが、聴衆にやさしいサインであってほしい。

客席のおしゃべり

開演前の客席には期待と軽い興奮に包まれたたある種のざわめきが漂う。そのざわめきの表情もその日の催し物や演奏者によって様々であるが、時に、ご婦人の限りないお喋りに悩まされることがある。音楽にはまったく関係のない家族の話、世間話、これが演奏の寸前まで熱心に続く。拍手しながらお喋りが始まる。たまったものではない。

かつてのオペラハウスは教会と同じようにその地域の人々の社交の場であったと聞いている。当時の小屋は賑やかであったであろう。しかし、クラシックのコンサートで演奏前にこの独りよがりのお喋りが入ると、席を立ちたくなる。コンサートホールにあってはならない音公害というべきである。

客席の沈黙

今年の10月、東京文化会館の小ホールで、インマゼールによるフォルテピアノの演奏会があった。曲名はシューベルトのソナタ3曲、ピアノのリサイタルといえれば若いお嬢さんが多く、華やかな雰囲気にも包まれるのが普通であるが、この時は開演前の数分間、まったくといえる程の沈黙が続いた。静寂というより、まさに沈黙であった。これは、フォルテピアノとシューベルトのソナタに集まった聴衆がつくりだした異様な音風景といえよう。

また、11月サントリーホールのポゴレリッチのピアノ演奏会でも、会場の咳一つに敏感に反応する彼の態度に、この種の沈黙が続いた。席が舞台後方のポディウム席だったので、正面の千数百席を埋めた聴衆の長い沈黙はやはり異常であった。これは、演奏者が作り出した音風景である。

コンサートホールでは静寂といえる瞬間がいくつかある。しかし、あまり長い静寂は不自然である。

開演前のアナウンス

いま、あらゆるホールで繰り返されている写真の禁止、時計のアラームの解除を求めるアナウンス、まったく気分を害する音風景である。津田ホールでは客の補聴器からの雑音で大騒ぎをしたことがあったし、サントリーホールでは、カメラのフラッシュのチャージの信号音で騒いだ事もあった。原因は聴衆側にあることは明らかであるが、プログラムに挟むなど何とか方法

はないものだろうか。

岐阜の中心地にメルサホールという小さなコンサートホールがある。ここではこのアナウンスがなく、実にすがすがしい気分でコンサートに入れたことを思いだす。聴衆のマナーもよく、終演後のフラッシュもなかった。このようなコンサートは実に心地好い。

いま、一部の駅ではアナウンスを省略している。少しづつ、コンサートの内容をみながら、アナウンスの省略を試みてみたらいかがであろうか。聴衆の自覚を促す意味からも考えていただきたい。

空調騒音

最近のコンサートホールの空調は実に静かになった。演奏中、あの一瞬の静寂がただよときでも、空調騒音を感じることはなくなった。それだけに、NHKホールや東京文化会館大ホールの一部の席で聞こえる空調騒音は耳障りである。池袋の東京芸術劇場のコンサートホールでもやや気になる。オルガンのファンの音もうるさい。

ただ、この静かな空調が災いしているホールもある。普通の空調騒音ならば、聞こえないことのない鉄道騒音や巷の音が静かなだけに聞こえてくるのである。空調騒音をわずか数ホンあげればまったく問題にならない騒音であるが、これを建物側で遮断しようとする、大規模な防振遮音構造が必要になる。騒音も使いようで毒にも薬にもなる。薬になる騒音をマスキングサウンドといって、一部の事務所空間のプライバ

シーの確保に利用されている。

会場の咳払い

一曲が終わり、その緊張から解放されたとき、会場では待ってましたというばかり、咳払いがほとぼしる。これもコンサートホール独特の音風景である。このような賑やかな咳払いはわが国独自のものなのであろうか、そういえば、欧米のホールについては明確な記憶はない。

いま、紹介したボゴレリッチの演奏会で、彼が鍵盤に手を下ろそうとしたとき、会場から一つの咳払いが聞こえた。演奏者にとって神経を集中した途端の音に、タイミングを崩されたのであろう、手の動きがとまった。そこには何と言うか気まずい沈黙が続いたのである。演奏者の緊張感が伝わってくる一時であった。

コンサートホールは響く空間であるだけに、小さな音も会場に響きわたる。くしゃみを押さえるのに、唇を舐めまわして我慢された経験のある方もいらっしゃると思う。サントリーホールでは会場の売店で咳止めの飴を売っている。一斉の咳払いはやはり異様な音風景である。

いびき

コンサートには身も心も体調を整えて出掛けるのが理想である。しかし、現実には過密のスケジュールを工面して、その日の疲れを背負ったまま出掛けることが多い。その結果、第一曲が始まるとともに、睡魔がやってくる。頭の一部で遠くに音楽を聞きながら、うとうとと霞んでくる。これがまた、いい気分なのである。不思議なことに現代音楽では眠くなることはない。

わずかの時間、うとうとすることで頭がすっきりと冴え、後半のコンサート新鮮な気分で音楽に集中できるならば、一瞬の眠りは貴重である。時差がとりきれずに望んだ外国のコンサートで、睡魔との戦いという惨めな状態で終始したという経験もある。

端で迷惑なのがいびきである。本人には聞こえないのであろうか。この波にのったようないびきの低音は会場によく響く。いうまでもなく、いびきの犯人はきままって仕事に疲れきって飛び込んできた小父さん族である。

拍手

コンサートには拍手は付き物、最近ではブラボーも聞くことが多くなった。この拍手であるが、この音はまさに白色雑音、その音色、その漂い方がホールによって違うのは面白い。拍手が空間一杯に沸き上がるようなホールもあれば、拍手が客席にへばりついているホールもある。クラシック、ポピュラーに限らず、ホール一杯の拍手こそ演奏者にとって何よりの音風景なのである。拍手の勢いがないため改修したホールの例もある。

ホールに現れる怪音

オペラ座ではないが、ホールによっては正体不明の怪音が現れることがある。筆者が始めて経験したのは東京郊外のあるホール、たしか、ベートヴェンのヴァイオリンコンチェルトだっ

たと思う。ヴァイオリンの流れに呼応して、すすりなくような声が天井面から聞こえてくるのである。その正体はまったく掴めなかったが、原因は排煙口のガラリーに風が当たっていわゆる風切り音が発生し、それが排煙ダクトをとおしてホール内に伝ってくることを突き止めたのである。この怪音は強い風がある角度でガラリーにあたらないと発生しないから、その確認まで時間がかかった。ホールにはその外、屋根をたたく雨音、雨樋をつたわる流水音など、ちよつとでは気付かない騒音がある。これらの音は直接聞けば、すぐそれと分かるのだが、遮音構造や吸音ダクトなど、普段とは違う経路を通してくるものだから、正体不明の怪音となるのである。

コンサートホールといえば、格式の高い文化施設の代表のようにとらえられがちである。しかし、そこには、様々な音風景が展開される。施設からの音もあり、聴衆がつくりだす音もある。あつてはならない音風景もあり、心地好い音風景もある。今後のコンサートホールの音響設計ではたんにホールの響きだけではなく、総合的な音環境の設計を考えてみたいと思っている。アナウンスの音一つとってもまだまだ考えるべきことは尽きないように思っている。

